

# 博士論文要旨

## 論文題名：天保の改革期における女訓と錦絵

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻 博士課程後期課程  
トットヒル・ヴァネッサ  
TOTHILL, Vanessa K.

天保12年(1841)から同14年(1843)にかけて施行された天保改革は、短期間ではあったものの、江戸で作成された色摺の木版画である東錦絵の内容に大きな影響を与えた。本論では、木版印刷史上ごく短い期間だけに見られた、美人画や役者絵出版への公儀による検閲の直接的な影響について解明していく。なお、こうした研究手法は、浮世絵や古典籍のデジタルアーカイブ、及び一次資料の記録に用いられた高解像度画像の使用によって可能となった。また、名主単印時代(1842-1846)の浮世絵版画年代考証については、佐藤悟氏、岩切有里子氏、アンドレアス・マークス氏等の先行研究によって大きく促進している。こうした研究成果にもとづき、現在では天保改革後の浮世絵についての詳細な研究が行われるようになってきていることを付け加えておく。

天保13年(1842)に老中水野忠邦のもと、徳川幕府は美人画や役者絵の出版に関して制約を加えると同時に、以前から版画に描かれる内容や価格を自主的に規制していた版元達による株仲間を解散させた。これを受けて、江戸町奉行は遊女と歌舞伎役者を描いた出版物に対しての禁令を強行した。これと同時に、版元や浮世絵師には女性や子供に向けて善悪の区別を教えることにより、忠誠心や忠孝、さらに節義を啓蒙するような図案のものを刊行するようにとの指導も行っていった。

ゆえに、本論では女性に対する教育指導を目的とした教訓絵シリーズの錦絵に注目していった。本論では公儀による検閲と、消費者への教化を提供すると称する教訓絵シリーズとの間に存在する関係性について明らかにした。言葉と図像によって構成された画中の文字と絵は、児童用の教科書である往来物や女性向けの文章規範を綴った女子用往来にも見受けられるものである。なお、教訓絵と往来物との関連性については、いっそうの研究を必要とするものではあるが、未だに研究は不十分な分野であると言える。

天保改革後には、歌川派による教訓絵は、往来物として普及していた道德教育からの影響を受けた。これらの教訓絵群は『廿四孝』や、模範とすべき女性達の伝記を記した『列女伝』をもとにしたものであり、中国の作品でありながらも文化的に日本へ土着化させることに成功したという意味で、さらには神仏習合と新儒学との融合を示す事例としても評価することができる。

『列女伝』に依った美人画のシリーズについては、歌川国芳が選択した手本例は中国の理想的な

女性規範と一致はしなかったものの、忠孝節義の道徳的価値を再確認する役割を果たすことはできたのである。

天保改革期の前後における「鏡山旧錦絵」のお初を描いた役者絵の考察では、役者絵出版禁止の影響力の大きさを見て取ることができ、加えて鏡山物の出版物における、テキストイメージに注目して考察を行った。例えば、従来あまり研究されていなかった、画中に芝居のセリフを描き込んだ天保前期の役者絵に注目したのである。他にも、役者絵の禁止によって出現したジャンルである歴史的な絵でも、絵師と版元は教訓的な小話と、敢えて役者を特定できないようにした歌舞伎芝居の一場面を組み合わせたのであることが判明した。本論では歴史的な絵を検閲をくぐり抜けた役者絵として捉えており、実際に弘化3年(1846)から同4年(1847)の段階で既に、絵師は敢えて画中に役者名を記さないという手法を取りつつ、役者の似顔を慎重に再開し始めていた。数年に及ぶ役者絵出版の空白期間の後、弘化4年に役者絵が再開された際には、公的な検閲への譲歩として、歌舞伎の観客に対しても役者絵を通して儒教的な道徳観の教育を行うことが提唱されたのである。

さらに本論では、「婦功」という貞節や武勇によって自らの功名を立てた妻や娘達に焦点を当てることにより、『列女伝』の主題について詳細に考察した。この時期には、歌川派による美人画シリーズで、様々な教訓書の書名(『嗜み草』、『教え草』、『心得草』、『養い草』、『譬え草』)を想起させるような面白みを欠いた題が付けられている。こうした教訓絵は、婦道についての提言を提供すると共に、道徳教育、家事、結婚、そして子供の養育に関する様々なテーマについて取り扱っている。つまり、検閲下の美人画は、遊女や芸者を描くことが禁じられたことによって生じた隙間を、こうした内容を扱うことによって埋めようとしたのである。

教訓絵は女子用往来物のパロディーとして着想されたものではあったが、中には実用的な情報を伝えたり、あるいは都市生活をおくる庶民に必要とされる事柄を反映するようなデザインのものも存在している。本論では検閲と教訓的な浮世絵版画との関連性についての考察を通して、教育と天保改革後の社会統制の繋がりについて重視してきた。天保改革後の浮世絵版画には、公儀による道徳教育の洗脳の過程と、僅かながらではあるものの、公儀の動きに対して抵抗を示した版元及び絵師達の努力の痕跡を見出すことができるのである。